平成11年3月11日（木）

第二六二回　史跡めぐり　資料

バスで益子　笠間

越谷市郷土研究会

第２６２回　史跡めぐり　ご案内

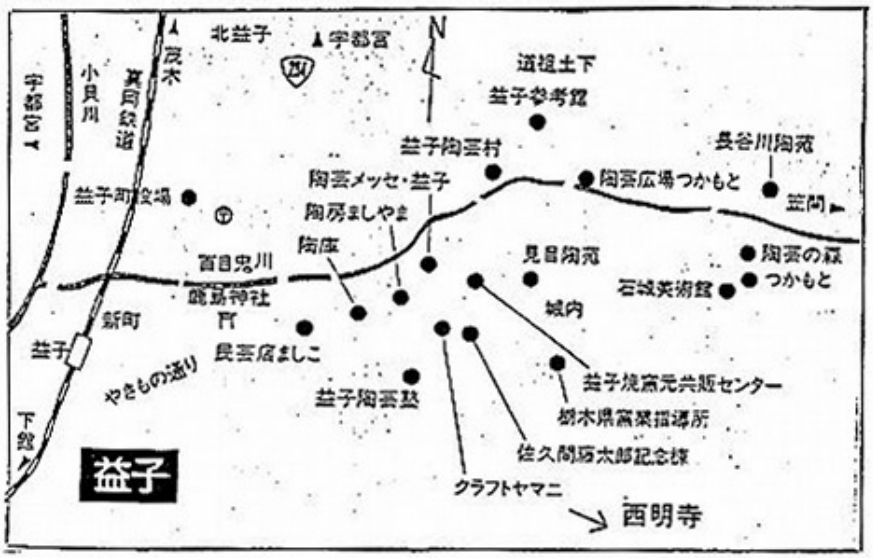
と　き　平成１１年３月１１日（日）

集　合　午前７時１５分・南越谷駅前

コース　南越谷駅前（7:30）＝佐野Ｓ．Ａ＝益子参考館＝陶芸メッセ・益子＝益子焼共販センター＜昼食・買物＞(13:30）＝西明寺(14:15）＝笠間稲荷(16:00）＝岩間Ｉ．Ｃ＝三郷Ｉ．Ｃ＝南越谷駅前＜帰着予定18:00 ＞

参加費　５，０００円（交通費・入場料・昼食代含む）

案内者　幹事・宮川　進



益子町

真岡市の東につづく町で、陶器"益子焼"の産地として古くから知られている。昭和二九年（一九五四）六月、旧益子町と田野・七井の両村が合体して成立した。

町の南東部には高館山・雨巻山など八溝山地の山々が分布する。大羽・小宅などの諸支流を集めて北西部を南西へ流れる小貝川の流域には広い沖積低地がひらけて、水田地帯になっている。

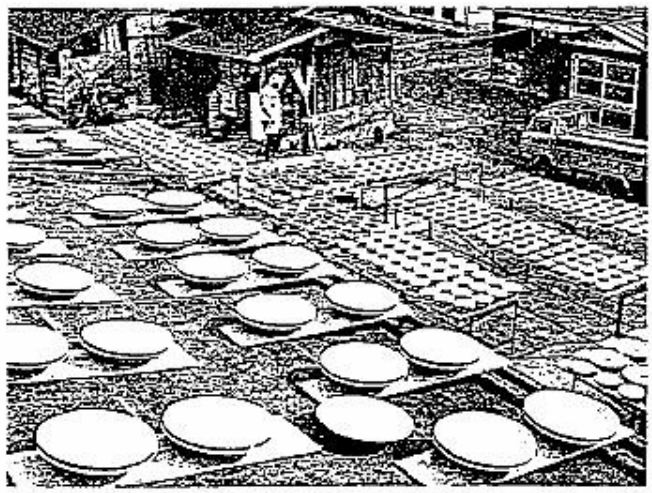
町の歴史は古く、町内各所に散在する古代窯跡や古墳がそれを示している。鎌倉時代初期には、現益子市街東側の高館山に、益子氏（紀党）が城を築き、以後、戦国末期の益子氏滅亡までの四〇〇余年間、その本拠として栄えた。

近世には黒羽藩領とされ、明治維新を迎えている。

主産業は農業で、米・麦・タバコ・畜産中心の営農が行われている。

工業は、嘉永六年（一八五三）以来という古い伝統をもつ窯業が中心であったが、昭和三五年ごろから食品・機械工業が誘致され始めた。陶磁器は、今も益子の特産品として広く知られている。

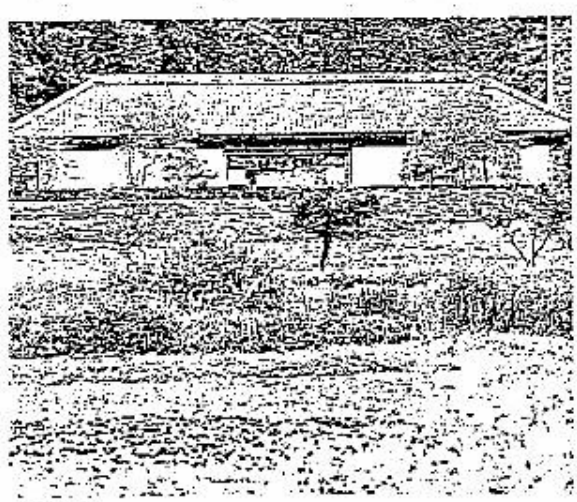
益子焼の関連施設としては、焼き物の街ならではの、濱田庄司の仕事場であった益子参考館、野焼きからコンピューター制御のガス窯まで窯のことなら何でもわかる陶磁器窯の博物館（☎0285-72-3111）や、益子焼のすべてを見て体験できる陶芸メッセ・益子（☎0285-72-7555）、その一角にある益子出身の版画家笹島喜平の作品を集めた笹島喜平館、また益子最大の展示販売センターの益子焼窯元共販センター（☎0285-72-4444）などがある。


益子焼

見どころとしては、県指定有形文化財の銅造阿弥陀如来立像をもつ光明寺（字山本）、字北中の風戸塚古墳（県指定史跡）、などがある。

町域南東部の高館山一帯は益子県立自然公園に指定されている。

また毎年七月二三～二五日には益子祇園祭が行われる。


益子参考館

益子参考館

町内益子（真岡鐵道益子駅から35分 N36°28'01.62" E140°06'43.03"）

益子焼の作陶家で重要無形文化財の保持者であった、故濱田庄司氏の作品と、氏が収集した陶磁器・染織・石製品・木工品などを展示している。氏の仕事場と三棟の陳列館からなり、四棟ともに益子周辺の古民家を移築したもの。工芸家や一般の人々に浜田庄司の人と作品を鑑賞してもらうため、昭和五二年四月に、一般公開された。

- 開館時間：9時30分～16時30分
- 休館日：月曜・年末年始・二月

☎0285-72-5300

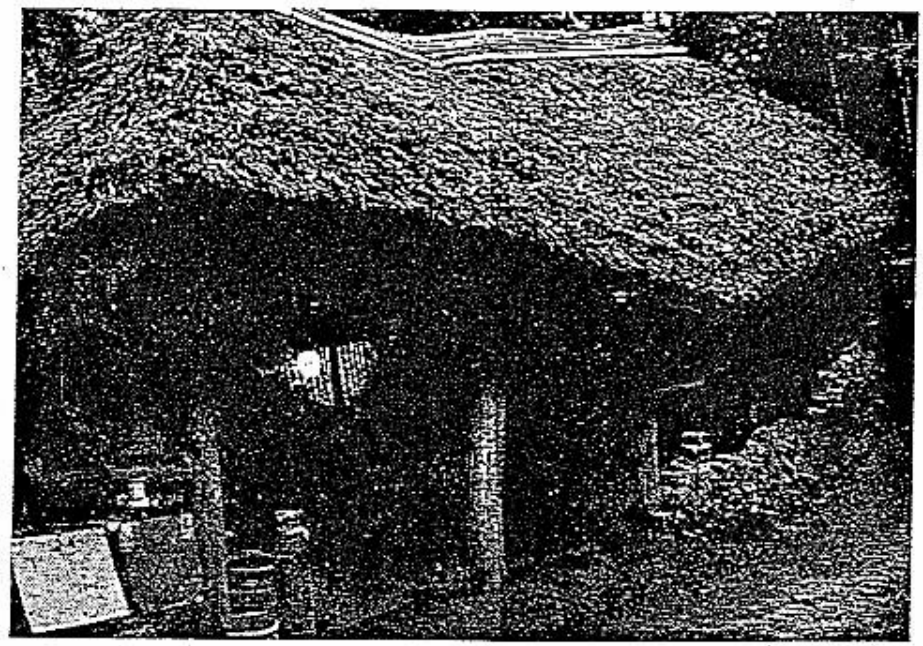
◉益子焼　首都圏内最大の窯業地としてブームのなかにある益子焼は，1852(嘉永５)年，大塚啓三郎によって創始されたと伝えられる。彼は茂木町福手の出身で，笠間焼を習得して益子町根子屋に窯場を開いた。その後黒羽藩の飛地の益子に郡奉行として着任した三田称平によって軌道にのった。作品は「称平徳利」として有名である。また啓三郎は陶祖とよばれ，西明寺境内に大塚陶師碑が建立されている。

窯は明治初期には二十数軒を数え，北郷谷・不知窪といった陶土採掘地近くに築かれた。場所は登り窯のため15～20度の傾斜地で，水が豊富，燃料の松薪が入手しやすい所であった。大正期まではほとんど半農半陶で，製品も土瓶・土鍋・火鉢・植木鉢など日用品が主であった。益子焼の発展は明治30年代に入ってみられ，1903(明治36)年，製造業者は益子陶器同業組合をつくり陶工の養成に努め，同年，組合立の益子陶器伝習所が開所され，1913（大正２）年には町経営になった。

大正期に入るとアルミニウムなどの軽金属におされ，第１次大戦で不況が続いたが，1923（大正12）年の関東大震災で皮肉にも活況を呈した。翌1924年は益子焼にとって一大転期の年となった。浜田庄司の益子定住である。日用品から民芸品としての益子焼への脱皮となった。昭和に入って益子焼の向上を目的に益子陶器製造人組合が結成され，価段協定がなされたが，皮肉にも労働争議が起こった。1934（昭和９）年には七井村（現益子町）で陶器工場争議が起こった。いっぽう，1937年に土瓶の絵つけ師皆川マスの作品は，ベルリンの世界手工品展覧会で特選になりその名をあげた。陶器伝習所も1939年には県営となり，名も栃木県窯業指導所と改められた。第２次大戦後内外の著名人が浜田氏を訪ねるようになり，1947年，天皇陛下は益子焼に関心を抱かれた。特に浜田庄司の1953年の文部大臣賞受賞，1968年の文化勲章受章は益子焼の名をさらに高めた。現在，年間90万人もの陶芸客が訪れる。

浜田氏が定住の地をここに選んだのは、小学校で使われていた山水土瓶の産地が益子であることを知り、訪れてこの土地の豊かな環境状況に感心したためだった。「私が入った大正十三年頃の益子は、何十年も窯や掘鉱や、土瓶を作っていて、関東一帯で使われていながら、使う人にはどこで出来たかも知られていなかった。東京の近くにこれほどまでに乱れていない窯場があるとは思いがけなく、私は東京の学校や、京都の試験所で学んだものをひと流しして、暮らしにも仕事にも一途に健康さを求めた。窯も釉薬も土も釉も、すべて益子のものだけを使った」と氏は語っている（『浜田庄司作品集』図録、朝日新聞社昭和四十二年刊）。はじめは不審の念で見ていた地元の人びとも、やがて浜田氏の真意と人となりを理解し、そのみごとな仕事に傾倒して、氏の作風を学ぶ陶工たちが続出した。氏は益子の伝統を汲み、益子は氏の作品に刺戟されて、大きな転換期を迎えたのであった。また、民芸運動によって認識された益子焼は、そのために新しい需要層を得たことにもなり、東京をはじめ全国の愛好者に愛用されるようになって行った。

益子浜田窯



浜田庄司

「私の仕事は英国ではじまり、沖縄で学び、益子で育った」と氏は語る。東京蔵前の高等工業窯業科から京都の陶器試験所へ入った氏は、大正九年、バーナード・リーチ氏の帰英に伴なって英国へ渡り、コーンウォールの漁村セント・アイヴスに登窯を築いて、リーチ氏とともに作陶生活を営んだ。この三年間の英国の田舎の生活と、渡英以前に訪れた沖縄の壺屋窯の仕事ぶりとが、浜田氏の将来を決定したと言えよう。氏が日本へ帰って、益子に生活と仕事の場を求めたのは、益子が、東京の近在でありながら、民窯として遅しい健やかさを保持していて、村全体の人びとの暮しぶりにも自然な性質が強く流れていることに惹かれたからである。こういう環境こそ氏が望んだ仕事の場であった。工芸の基礎は暮しにある。浜田氏の製陶は、陶器を作ることとともに、暮しを築くことからはじまった。

益子は、幕末から盛んになった雑器窯で、甕や摺鉢や、有名な山水土瓶などの生活用品を焼き、東京をはじめ関東一円の台所の器を引受けていた純粋な民窯である。陶土としてはさして上質ではない土を、焼物作りのそれぞれの家が、家族ぐるみで採掘してくることからはじまる、典型的な民器の産地である。鉢や甕や皿には、素朴で強い色合の飴や柿や黒や青の釉が掛けられ、また流されているだけだが、丈夫な形と熟練した轆轤の技を持つ益子の雑器は、民窯の品共通の健康さのなかに、関東の気性をひそませた張りの強さがある。そして、都会の用具として使われながら、都会趣味に毒されない自然さを保っていた。氏は、この自然さをみずからの製陶の理想とした。生涯に五百万個以上の土瓶に絵付をしたであろうと言われる皆川マス女のような、生粋の工人たちを師と考える浜田氏の仕事は、今日に至るまで、一貫して自然な健やかさを強い続けた精励である。

このようにして、心の場よりはじめられた浜田氏の仕事は、当然、工芸美術家のような見せる焼ものではなく、用の器を作ることに全力が注がれた。世人は氏の名声に惑わされて、氏の作品を、飾る器だと誤解している向が多い。もとより、器は用いるとともに見る対象であり、すぐれた用の器は美事な見どころを持っているから、浜田氏の器を飾ることも一向に不都合ではない。だが、氏の器の美しさは、用いることへの考慮をつねに先立ててあるところから生れたものだ。飾るよりも、用いながらの方がより美しくなる性質がある。これが、他の工芸美術家と決定的に異なる点である。かれら一般の品は、飾っても美しさは貧しく、用いてはほとんど役に立たない。

用を第一とするところから、浜田氏の焼ものは異常さを自然に現わしてくる。作家が、他人に追随できない技巧を凝らし、異常な創造力を誇るための造型に腐心するのとは全く逆に、浜田氏は、誰にでもできる当り前な姿に器を作り、装飾を施す。平易で自然なことこそが氏の理想である。

第二十番　獨鈷山（とっこさん）　西明寺（さいみょうじ）

真言宗豊山派

〒321-42　栃木県芳賀郡益子町大字益子四四六九　☎0285 57・2・2957

本尊●十一面観世音菩薩　開基●行基菩薩　創立●天平九年（七三七）　住職●田中雅博

●詠歌●西明寺　ちかひをここに　尋ぬれば　ついのすみかは　西とこそきけ

山門は三間に二間の宣旨二重扇垂木入母屋作り、楼門作りの古雅な八脚門であり、室町末期明応元年（一四九二）の建造で「独鈷山」の額をかかげている。この門の特色は、斗拱三手先、一見円柱に見える柱が実は三十六角型に削られていること、両袖の金剛力士の見える窓が狭いことなどである。三重塔は各層とも柱間三間四面の銅茸二重扇垂木・三手先の荘重な唐様と天竺様を加味した建築で、これは天文六年（一五三七）六月十八日、西明寺城主益子宮内大輔紀家宗が寄進したものである。この塔の特色は、屋根が急であるため最上層は三段に中下層はそれぞれ二段に茸下げられていることであり、軒の出は深く、また軒の曲線に変化があって、ともすれば重たく感ぜられる屋根に軽妙感を与えていることである。室町後期の作だけあり多分に禅味が加味されていて、彩色もなく簡素であるが、紅一点ともいうべき蟇股の透彫は技法の卓抜さを物語っているといえよう。仁王門・三重塔は共に旧国宝の重要文化財であり、近年修理が施された。

仁王門をくぐった庭の右手にある小規模な萱茸建物は閻魔堂で、これは正徳四年（一七一四）三月再建であり、中に安置する閻魔大王像は関東随一といわれている。侍者と共におどけた顔立の閻魔像は、怖いどころか、思わず微苦笑を催す有難い御像である。庭の左隅にある鐘楼はこれまた簡素な作りの年代物で、恐らくは梵鐘と同時に建てられたのであろうか。鐘は高さ二尺四、五寸、寛文十二年（一六七二）九月在銘であるが、さらに明治三年梵鐘献納の事態が起り、時の住職賢譲和尚はこれを憂いて募金により鐘を造ったということが追刻してある珍しいいわくつきの鐘である。

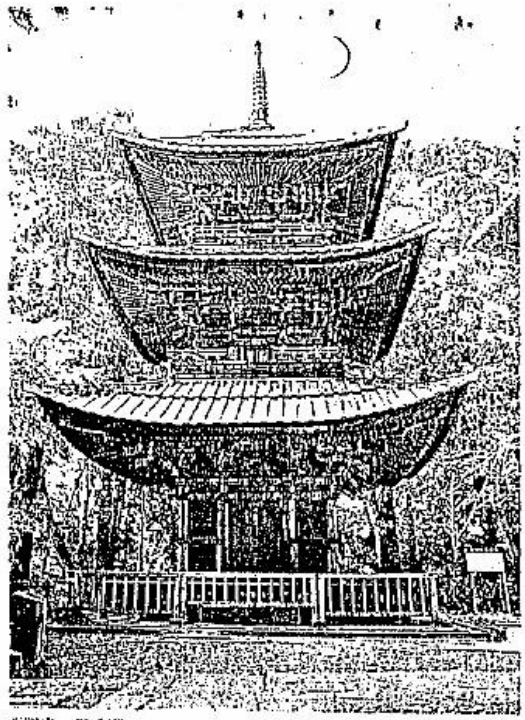
観音本堂は萱茸寄棟作り、二重扇垂木、斗拱三手先の六間四面の建物である。この建物は鎌倉の初期治承年間の創建で、承元三年（一二〇九）五月、宇都宮氏によって改修されたが、外陣の増築は元禄十四年（一七〇一）十二月といわれる。内陣には行基僧正作と伝える十一面観音のほか、室町期の五尺八寸等身大の千手観音・准胝観音を安置している。なお建物に組込んだ本尊厨子と四天王像とは、現在重要文化財の指定をうけている。

さて観音堂の参拝が終り、ふと堂前を見返れば、一本の椿が緑の葉も厚く植込まれているのに気付くだろう。これは天然記念物「法華の椿」である。昔、鎌倉の執権最明寺入道時頼公が巡錫の折、この地にしばし滞留され、六堂伽藍を再興し、そのため寺名を西明寺と改めたというが、そのとき手植になった木の一本がこの椿だと言い伝えられている。樹齢七百年を数えて、なお例年美しいピンクの花を咲かせている。西明寺の古歌に、

尋ねくる人に恵の益子山
　ついの住家へ引接の寺

というのがあるが、これは入道時頼の作だと伝えられている。

坂東二十番の西明寺は、縁起によれば、聖武天皇の天平九年（七三七）、国母陛下の御願により行基菩薩が開基したところという。行基菩薩は勅を奉じて十一面観音を刻み、これを初め豊前の国に安置したが、のち東国遊化の折、益子山の地が四方山巓に囲まれ、中央に清き水が流れ、まことに修道の士を奬うにふさわしい地であることを感得されて、かの地の尊像をこの地に移して安置されたのだそうである。



西明寺　三重塔

延暦年間（七八二～八〇六）には一山十二坊を数え、隆盛をきわめたというが、のち荒廃。二五〇年余りのちの康平年間（一〇五八～六五）、紀正隆が寺の背後の高館山に居館を築いて入り、その子紀行宗が住職の泉信に帰依、寺に保護の手を加えた。紀氏は永久年間（一一一三～一八）ごろから益子を氏とし、治承二年（一一七八）に諸堂宇を再興した。承元三年（一二〇九）に宇都宮景房が本堂を修営、建長年間（一二四九～五六）には寺観は旧に復した。

正平六年、益子城落城の際の兵火を浴びて一山灰燼に帰したが、応永年間に再興された。近世には江戸幕府から寺領四〇石の寄進を受け、黒羽藩主大関氏の帰依も厚く、たびたび堂宇の修営が行われて今にいたっている。

境内は約六万九〇〇〇平方㍍、境内入口から本堂にいたる約一〇〇㍍の坂道の両側には、巨木が何十本も立ち並ぶ。〝シイ林叢〟として一帯が県の天然記念物指定を受けている。なおシイは暖地性の常緑樹で、このあたりが北限とされ、緑の多いこの寺独特の雰囲気を作り出している。

諸堂宇中、明応元年（一四九二）建立の楼門と天文年間（一五三二～五五）に建てられた三重塔は国の重要文化財で、元禄一四年（一七〇一）に再建された本堂と鐘楼は、県の有形文化財指定を受けている。本堂内にある宝形造の一間厨子も国の重要文化財で、応永元年（一三九四）につくられたもの。寺宝の木造閻魔王坐像および両脇侍像・千手観音菩薩立像・千手観音菩薩座立像・本堂厨子内仏像群・梵鐘が県の有形文化財に指定されている。また、境内は県の史跡に指定されている。

〔宗派〕真言宗豊山派　〔山号〕独鈷山薬門院
〔重文〕楼門・三重塔・本堂内厨子

笠間市と水戸線沿線

水戸線は、栃木県小山市と水戸市をつないで県を東西に横断する。

笠間は、稲荷神社の門前町として栄えたところ。そこで開かれる菊まつりは、水戸の観梅とともに、県内有数の年中行事として、年々にぎわいをみせている。

郊外に足を伸ばすと、浄土真宗の別格本山西念寺や楞厳寺・岩谷寺などがあり、水戸線を西へ向かうと、月山寺・薬法寺（前引観音）などの古寺巡礼も有意義なコースである。

下館・結城の両市は、商業と織物の町。派手さはないが、中世以来の伝統芸を受け継ぐ静かな町である。今なお上質の真綿から手織りで行われる紬織りは、ひときわ優雅な伝統の味わいをもっている。

ここでは笠間・下館・結城の三市と、西茨城郡の一部と真壁郡の各町村の風物を紹介してみる。

笠間市

笠間市は水戸市の西方およそ二〇キロ、四方を山々に囲まれた笠間盆地の中にある。昭和三〇年二月、笠間町と大池田・北山内・南山内の三ケ村が合体して誕生。同三一年に友部町の一部を境界変更し、同三三年に稲田町を編入し、同三三年八月に市制を施行した。市の中央やや東寄りに佐白山がそびえ、市街地の中央には、涸沼川が貫流している。

一三世紀の初頭、笠間時朝が佐白山に山城を築き、その後一八世紀にここに入封した牧野氏によって、初めて城下町としての完成をみた。また、ここは広く知られた笠間稲荷の門前町であり、水戸・結城・小山を結ぶ宿場町でもあったが、そうした三つの特色をあわせもち、"関東の小京都"として伝統を重んじてきた。

米・麦・タバコ・イチゴなどの農産物のほか、素朴な味で渋みと温さをもつ笠間焼や、すぐれた建築材として定評のあるみかげ石などを産出している。

笠間は、稲荷神社をはじめとして多くの観光資源に恵まれ、市内の由緒ある古社寺めぐりもできる。とくに、秋に催される絢爛豪華な菊まつりは、秋の風物詩となっている。特色ある地方文化の形成、地場産業・観光の振興を目的とした「笠間工芸の丘」が笠間芸術の森公園の隣接地にある。

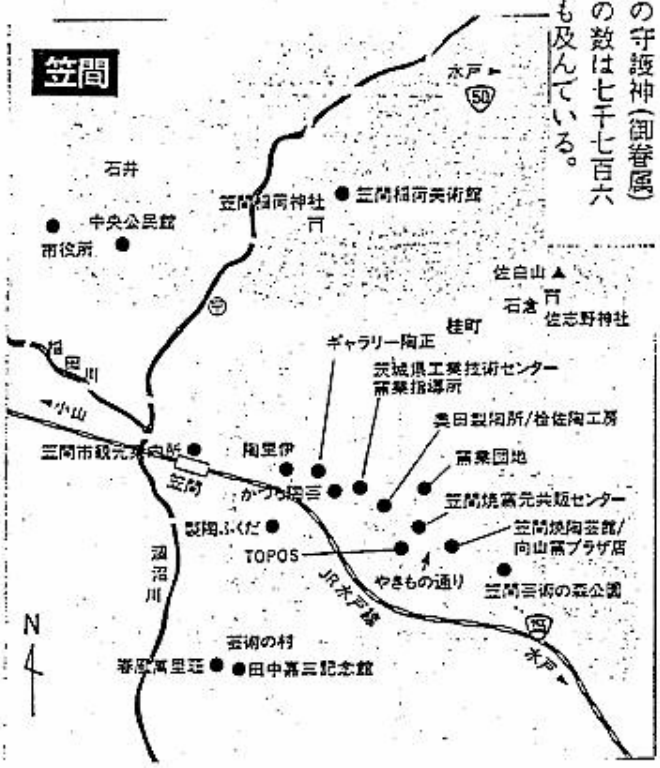
ほかに見どころとしては、親鸞聖人ゆかりの西念寺をはじめ楞厳寺・岩谷寺・稲田神社といった古社寺がある。箱田不動堂の木造不動明王並び両童子立像と上加賀田阿弥陀堂の木造阿弥陀如来坐像は、県の文化財に指定されている。

笠間稲荷神社の菊まつり

いなりしんこう　稲荷信仰　京都市伏見稲荷大社に祀られる稲荷大神（宇迦之御魂大神（うかのみたまのおおかみ））の信仰。この神は山城の帰化豪族である秦氏と特別の関係をもち、古く「山城国風土記」逸文にも、稲を象徴する神であることがみえている。五穀をはじめ、すべての食物や蚕桑のことをつかさどる神で、「稲生り（いねなり）」が約音便によりイナリとなったが、その神像が稲を荷っているところから、稲荷の字を充てたといわれている。わが国は往古から農業国で水田に稲を作り、米を主食としていたから、深く農耕神を信仰し、これが自然に稲荷信仰と結びついたと考えられる。平安時代に入り、教王護国寺（東寺）の草創に際して真言密教と習合し、稲荷神社は同寺の鎮守と仰がれ、朝野の尊崇をあつめて社運が隆盛となり、稲荷信仰もそれに伴ってひろく伝播し、特に初午などには一般民衆が群参した。中世から近世にかけて工業が興り、商業が盛んになると、稲荷の神格も農耕神から殖産興業神・商業神・屋敷神と拡大し、「衣食住の大祖、万民豊楽の神霊」と仰がれ、農村だけでなく、大名・町家の随所に稲荷神が勧請されるに至った。江戸の市中では、最も多いものの一つは稲荷神祠であるといわれたが、これは全国的な傾向で、津々浦々に至るまで、稲荷大神が奉祀された。この稲荷神勧請のことは現代も引きつづき行われ、現在その神社数全国で三万余に達し、諸神のうちでは最も多い。これに個人の邸内祠などを加えればほとんど無数であって、その信仰の広くして強いことが知られる。このことは稲荷大社の社頭や、お山（稲荷山）における信仰者の熱烈な行状からもうかがわれる。ちなみに、稲荷神の神使をキツネとする民間信仰（眷属信仰）は、中世にまでさかのぼり今なお根強いものがある。これは宇迦之御魂神の一名を御饌津神（みけつかみ）というので、キツネの古名のケツとの音通から、三狐神（みけつかみ）の字を充てたことにもとづく。仏家では稲荷神を経典中の荼枳尼天（だきにてん）に習合して祀り、狐に付会しているが、これらは本来的な稲荷信仰とはいいがたい。なお、本宮の背後の稲荷山には、各信者の守護神（御眷属）が祀られ、お塚と称し、その数は七千七百六十二基（昭和四十一年調）にも及んでいる。

参考文献　「稲荷大社由緒記集成」信仰著作篇、近藤喜博「古代信仰研究―稲荷信仰論―」、肥後和男「稲荷信仰のはじめ」（『宋』一）

（小島　鉦作）



笠間稲荷神社

市内笠間・三間駅からバス稲荷神社前下車
N36°22'55.79" E140°15'26.30"

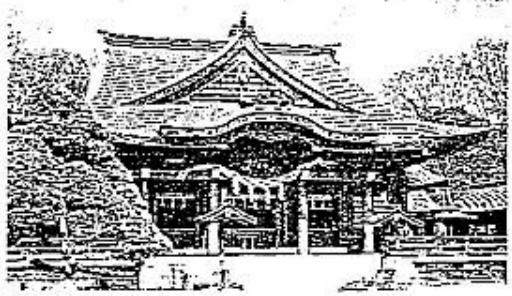
笠間駅の北約一・五キロにある。京都の伏見稲荷、九州の祐徳稲荷とともに日本三大稲荷の一つとも称され、宇迦之御魂神を祀り、五穀豊穣、商売繁昌、除災招福に効験ありとして、関東一円に信仰を集めている。

開基の年代は明らかでないが、一説では白雉年間（六五〇～六五四）の創建といわれ、社歴は古い。もとはクルミの大木の下に祠が建てられてあったともいい、土地の人たちは"胡桃下稲荷"などとも呼んでいる。

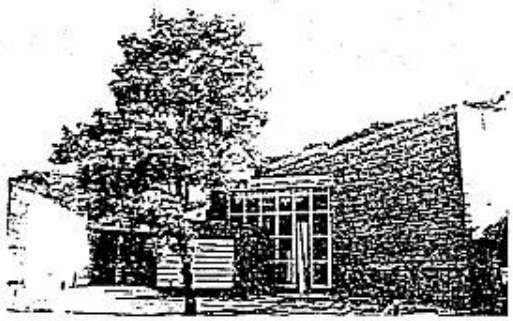
寛保三年（一七四三）、笠間城主井上正賢の手によって神域の整備や諸社殿の修営が行われた。現在の社殿は、安政から万延年間（一八五四～六一）にかけて再建されたもので、国の文化財に指定されている。本殿の壁面には龍・牡丹・唐獅子などの見事な彫刻が施され、色鮮やかな岡亭曲水の図が描かれており、それぞれに後藤縄之助・弥勒寺音八・諸貫万五郎といった作者銘が刻まれている。

年中行事も一月の歳旦祭や二月の節分、六月の御田植祭と多彩だが、一〇月中旬～一一月下旬に開催される菊まつりは、水戸の観梅とともに県を代表する花のまつりとしてよく知られている。菊まつりには、丹精こめた菊五〇〇〇余鉢が所狭しと並べられ、菊人形展も開かれる。この期間中、流鏑馬神事（一一月三日）、舞楽祭（一一月一三日）なども催される。

【祭神】宇迦之御魂神　【重文】本殿



笠間稲荷神社



笠間日動美術館

笠間日動美術館

市内笠間・笠間駅からバス常陽銀行前下車3分
N36°22'50.13" E140°15'39.26"

昭和四七年、東京銀座の日動画廊の創設者長谷川仁氏が建てた美術館。五階建ての館内には、佐伯祐三・藤田嗣治・岸田劉生などの有名な画家の自画像・パレット画をはじめ、レリーフ・絵画・遺品を展示。彫刻庭園の橋を渡ったところに、三階建ての新館もある。

- 開館時間：9時30分～17時
- 休館日：月曜、年末年始
- ☎0296-72-2160

笠間焼

笠間名産の笠間焼は、安永年間（一七七二～八一）近江国信楽の陶工長右衛門が招かれてここにかまをおこしたことから始まっている。ここで陶法を学んだ久野半右衛門らが後を継ぎ、本格的な製造を始めた。以後、笠間藩主の保護育成のもとに発展して今日に至っている。

笠間焼としては、当初、水ガメ・スリ鉢など日常生活に密着したものが作られていたが、最近では、笠間粘土の持味を生かした茶器・花器・食器・民芸品などもつくられるようになった。二〇〇余年にわたる伝統と技術から生み出される笠間焼は、庶民の工芸品だけがもつ渋味とあたたかい味のある陶器として高く評価され、市場に迎えられている。

参　考　書

＊民窯の旅　水尾比呂志著　芸艸堂　´７２．７刊

＊現代民芸論　水尾比呂志著　新潮社　Ｓ４３．１２刊

＊栃木県の歴史散歩　栃木県の歴史散歩編集委員会編　山川出版社　´91.6刊

＊坂東観音いまむかし　栗原仲道著　国書刊行会　Ｓ６２．３刊

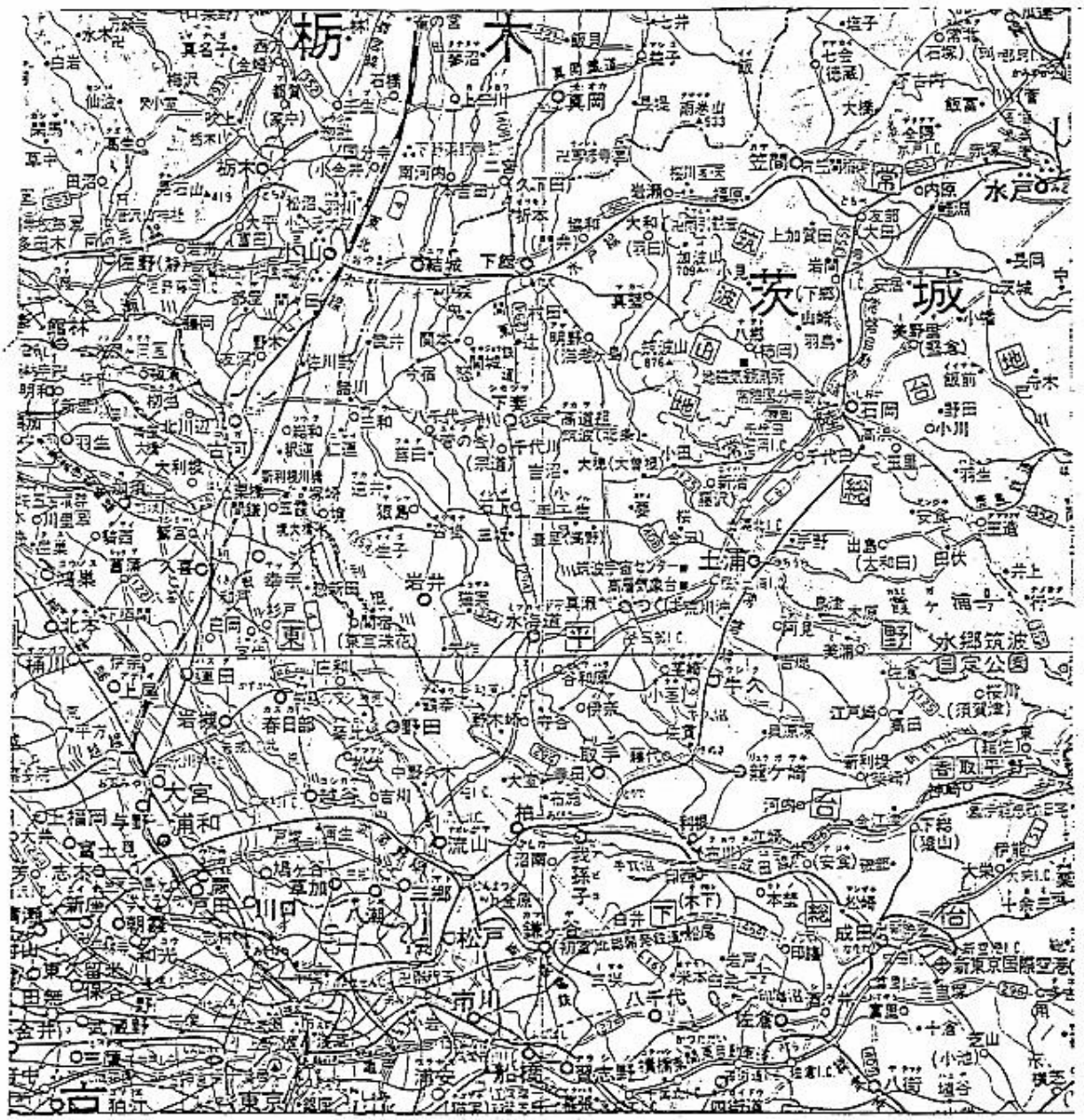
＊坂東三十三所観音巡礼　坂東札所霊場会編　朱鷺書房　´８８．５刊

＊郷土資料事典９　栃木県　人文社　´９７．３刊

＊郷土資料事典８　茨城県　人文社　´９７．３刊

＊国史大辞典　国史大辞典編集委員会編　吉川弘文館　Ｓ５４．２刊

＊やきもの買い物紀行　小学館　´９６．４刊

＊旅に出たくなる地図　帝国書院　Ｈ６．１刊

＊茨城県広域道路地図　人文社